

目的 和服構成は主として手縫いで行われるが、その可縫性の良否は作業能率上、重要な要因と考えられる。手縫いの場合、その可縫性は布と手・布と針・布と糸・針と糸などと複雑に関係する他、選針の際の布の動きが作用するものと考えられる。そこで今回は、織物の組織・厚み・かたさ・糸密度などの因子が、総合的に関連すると思われるせん断変形の結果から可縫性の傾向を考察した。

方法 試料は絹・綿・毛・化せん等各種の和服地を用い、せん断変形を測定した。また、可縫性の判定は官能テストにより行ない、その成績とせん断変形との関連について検討を試みた。

結果 この実験によりせん断変形の結果から、可縫性の良否を推定し得ることが可能と考えられる結果を得た。即ち、ヒステリシスループの面積及び勾配の数値の大きは、可縫性の順位の高さに、数値小は順位の高さに対応する。また、ヒステリシスループの面積及び勾配が小の場合は選針の際の安定度が低い傾向がみられる。